えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑮

蒲生家伊予松山在城之節郭中屋敷割之図

本壇の姿 多角形で複雑

関ケ原の合戦により伊予半国を与えられた加藤嘉明は、1602（慶長7）年、標高132㍍の独立丘陵の勝山に築城工事を始める。その25年後、嘉明は工事途中で会津に転封となるが、入れ替わるように、27（寛永4）年に松山に入ったのが蒲生忠知である。二の丸御殿は忠知により完成したと考えられているが、34（寛永11）年に忠知が急死、その翌年には松平定行が松山に入り、以後明治維新を迎えるまで230年余り、松平氏が統治することになる。

松山城と城下は、加藤、蒲生、松平の時代ごとに手が加えられているが、各段階の姿を探るには、城下絵図を用いるのが有効である。ここで紹介するのは、蒲生時代の絵図で、現存する松山城下絵図では最も景観年代が古いものになる。蒲生家では30（寛永7）年に重臣による内紛である蒲生騒動が起き、その2年後に福西吉左衛門が伊豆大島に流罪、3人の重臣も追放されている。本図を見ると、彼らの屋敷が記されていることから、忠知の松山入封時の屋敷割を示した絵図と見なせる。

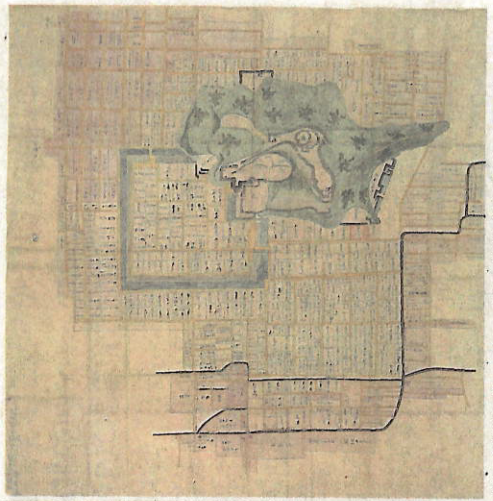
城下南部には藩主別荘の「花畠」や重臣の下屋敷、西部には忠知が菩提寺として創建した見樹院（後の大林寺）があり、この時期の城下の特徴がうかがえるが、本図で特に注目したいのは、多角形で複雑な形状をした本壇（天守がある曲輪＝くるわ）の描写である。西側と東側の2段構造になっており、西側の中央には「水」と記された貯水池が見える。方形を基調とする現在の本壇の姿とは大きく異なる。

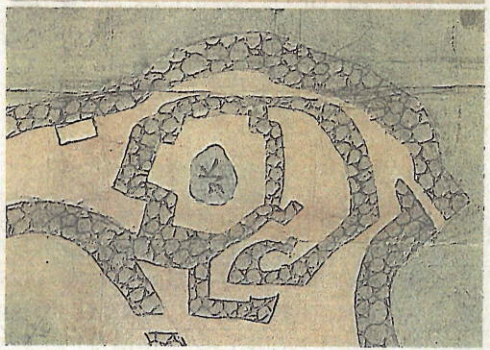
加藤嘉明の子孫が藩主となった水口（滋賀県甲賀市）にも、本図と同じ形状の本壇を描き、石垣の幅や高さなどがさらに詳細に記された絵図の残存が判明し、現在の本壇に先行する加藤、蒲生時代に旧本壇が築かれた可能性が高まった。

現在開催中の特別展「甦（よみがえ）る名城　香川元太郎城郭原画展」（11月26日まで）では、イラストレーターの香川元太郎氏（松山市出身）がこれらの絵図を基に考証して、江戸時代初期の松山城復元イラストを作成する過程を紹介している。ぜひその創作の秘密をご覧いただきたい。

（学芸課長・井上淳）

〈随時掲載します〉





㊤蒲生家伊予松山在城之節郭中屋敷割之図、県歴史文化博物館蔵㊦本壇部分の拡大

掲載許可番号：d20230301-04